



水共生社会の 実現に向けて ～水共生学からの提言～

水共生学国際シンポ ジウムを九州大学に て開催しました

3

令和3～7年度 文部科学省 科学研究費助成事業
学術変革領域研究 (A)

「ゆらぎの場としての水循環システムの動態的解明による
水共生学の創生」

CONTENTS

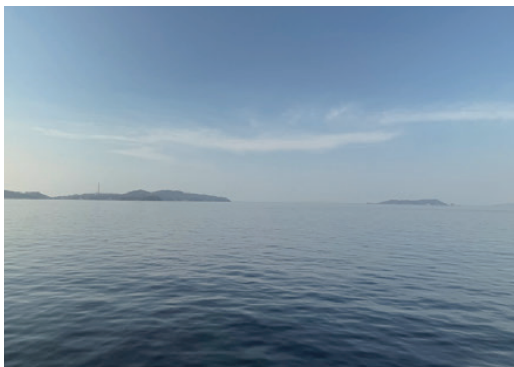
巻頭言	2
活動報告	
水共生学国際シンポジウムを開催しました	3
フィールド：道東地域（厚岸町） 北海道厚岸町でのワークショップ開催	4
フィールド：石垣市 2024 年「石垣島未来シナリオワークショップ」の 開催報告	5
研究者紹介	6
大野 智彦 中村 晋一郎	
成果発信	7
古川 不可知 単著論文『現代思想』掲載 気候予測データセットの公開	
ヨーロッパ川紀行	8
川の自然にみるヨーロッパの風土	

計画研究 B02 班に所属する伊藤幸司です。専門は歴史学、とくに日本中世史・東アジア交流史で、文字史料から歴史像を解明する文献史学の手法を用いつつ、考古学・美術史学・文学・人文地理学など隣接する諸分野の成果も援用しながら研究を進めています。また、史料に記される現地に赴き、歴史的景観を確認し追体験することも重視しています。

水共生学の活動では、2つのテーマを意識して活動しています。1つは、15・16世紀の東アジアの海域交流と港町のあり方で、特に九州島が外部世界と接する周縁地域に注目しています。すでに、日本列島・朝鮮半島の境界地域である対馬島の特質は周知のところですが、私は九州島と沖縄諸島との境界地域や、九州島東側の豊後水道兩岸地域に興味があります。前者は島津氏と琉球王国との境界、後者は豊後の大友氏と四国の河野氏・西園寺氏・一条氏などとの境界です。九州という枠組みを超えて存在する境界地域が、港町を介して政治・経済・文化の面でどのようにつながっていたのかが興味あるところです。九州の東西南北に展開する境界地域の存在は、九州が単純な一つの枠組みで語れないことや、九州という地域の枠組みを相対化するものだと考えています。

2023年3月の奄美群島踏査では、喜界島ぐすくの城久遺跡群、奄美大島の倉木崎海底遺跡、徳之島のカムイヤキ産地などを訪問し、九州島から南西諸島を経由して中国大陆に至る南島路の航路とその寄港地について思いを馳せました。南西諸島から九州島に分布するカムイヤキはどのように運搬されたのかが気になるところです。

2025年3月の南予・西予踏査の最後には、愛媛県の八幡浜港から大分県の臼杵港までフェリーに乗りました。豊後水道の潮流を見たかったのですが、あいにく伊予灘と日向灘の海水面



▲ 佐賀関半島と豊後水道



計画研究班 B02 伊藤 幸司
(九州大学 教授)

が均衡する時間帯であったため、海は池のように静かでした。逆に言えば、このようなタイミングであれば兩岸地域の船旅は容易であったことになります。戦国大名大友宗麟がいた臼杵の丹生島城からは四国佐田岬が遠望できるため、彼が四国に触手を伸ばそうとしたのも分かるような気がします。

もう1つのテーマは、岐阜県西濃地域の輪中わじゅうについてです。濃尾平野の地形は東高西低のため、木曽三川はすべて平野の西側に流れ込みます。大河川が集中する岐阜県西濃地域には、水



▲ 1976年9月12日の水害の時に運命を分けた輪中堤の切通。その時、奥側は助かり、手前は水没した。

害を避けるために、周囲を堤防で囲う輪中や避難施設としての水屋などが発達しました。しかし、高度経済成長期以降、モータリゼーションの発達にともない輪中堤が切られたり削られて消滅したり、水屋が壊されたりしています。輪中堤や水屋の存在は、その地域が水害に見舞われる可能性が高い場所であることを示す歴史的な証拠であり、自然災害伝承碑のようなものです。そこで、私は輪中堤の痕跡を確認する作業を試みています。現状、単独作業のため進捗はゆるやかですが、西濃揖斐川いび西岸地域の扇状地に接する輪中を中心に踏査を進めています。

水共生学国際シンポジウムを開催しました

藤岡 悠一郎（九州大学 准教授）

2025年11月1日-2日の2日間、九州大学伊都キャンパス稲盛ホールにて「水共生社会の実現に向けて ～水共生学からの提言～」と題する水共生学国際シンポジウムを開催しました。2021年より開始した本プロジェクトの最終的な成果報告と総括を兼ねたシンポジウムであり、領域メンバーの多くが参加しただけでなく、2024年に



▲ 荒谷 領域代表 挨拶

国際シンポジウムを共催したタイから11名、同年3月と9月の巡検で訪れたカンボジアから1名、台湾から1名の計13名を招聘し、口頭発表とポスター発表および、2日の総合討論に参加いただきました。

1日は領域代表 荒谷（九州大学）より開会挨拶をおこなった後、評価者である沖 大幹氏（東京大学）から基調講演として、水を自然や生態系、インフラにとどまらず、文化や景観を形作るものとしてとらえる「水みんフラ」についてお話しいただきました。地球圏-生物圏-人間圏の関わり合いから水をとらえることを目指す水共生学の概念と共通する部分も多く、大変興味深い内容でした。また、生物多様性を重視しない人にどうやって協働してもらうかという問いは、水共生学にとっても大きな課題と言えます。基調講演の後、セッション1から3において道東地域、北部九州地域、琉球地域と各共同フィールドからそれぞれ3人ずつの成果報告をおこないました。自然科学から人文科学まで、水共生学が掲げる学際研究を象徴する多様な報告でした。評価者である園部 哲史氏（政策研究大学院大学）からも幅広い分野からもたらされる知見に対する肯定的なコメントをいただきました。

2日は海外招聘者からの話題提供を中心とするセッションでした。最初に、タイ生物多様性センター代表のSomsak Panha氏（チュラロンコン大学）より、メコン川での生物多様性の解明と保全をおこなうプロジェクト

に関する報告がありました。続いて、Ekgachai Jeratthitikul氏（マヒドゥン大学）がインドシナ半島で見られる淡水貝類の分類について報告しました。外見だけでは測れない種の多様性と、貝そのものの大きさにも驚かされました。張東君氏（財団法人台北動物保全教育基金会）は絶滅の恐れがある石虎（タイワンヤマネコ）の保護に関するユニークな取り組みについて報告しました。台湾での野犬が生態系に与える影響について考えさせられました。HOR Sanara氏（カンボジア王立農業大学）はBattambang地域の農村での世帯調査によって、住民グループ間の農地アクセスの格差と教育機会がどのように生活に影響するかを分析し、それが環境保護にも影響する点を報告しました。



▲ Somsak 氏の講演

ポスターセッション後、海外招聘者を交えて総合討論を実施しました。登壇者は沖氏、園部氏、Somsak氏、張氏、HOR氏と本領域の計画研究班代表、百村 帝彦（九州大学）で、モデレーターは鬼丸 武士（九州大学）が務めました。各計画研究班代表が、現時点での水共生学の達成度に対する自己評価をおこない、その理由と課題、課題の解決方法に関する展望を述べた後、他の登壇者からのコメントを受けました。水共生学全体への課題として議論に上がったのは、社会実装の進め方でした。水共生社会を目指すうえで市民や行政とどうにかかわるのかについて、本領域研究の研究者間での議論を尽くすこと、各フィールドでのステークホルダーとの議論を重ねることが最も重要であることなどが指摘されました。招聘者も含め、複数のコメントや質問をいただき、水共生社会への道筋の困難さを共有しつつも、その方向を模索する水共生学への期待を感じる総合討論でした。

本シンポジウムは専門分野をまたいで複数の国の研究者が一堂に会し、意見を交わす場となりました。両日にわたりおこなわれたポスター発表では、参加者がポスターの前で発表者の話を熱心に聞き、質問する様子が見られました。国籍に関係なく足を止めて談笑する姿が会場の各所にあり、たいへん盛況でした。こうした交流から今後の水共生学の発展につながる芽が生まれると感じるシンポジウムでした。



▲ 沖 氏による基調講演



▲ 園部 氏によるコメント



▲ 総合討論の様子

フィールド：道東地域（厚岸町）

北海道厚岸町でのワークショップ開催

田尻 義了（九州大学 教授）

2025年7月12日（土）、北海道厚岸町に所在する厚岸町保健福祉総合センター会議室にて、大黒島を題材とした「ローカルディグプロジェクト」のワークショップを開催しました。本ワークショップは、小樽商科大学・NTT 東日本地域循環型ミライ研究所・水共生学との共同プロジェクトの一環として実施されたものです。

大黒島は水共生学ニュースレター vol. 9 でもご紹介したとおり、厚岸町の沖合に位置する現在は無人の島です。



▲ 大黒島遠景

コウジロウミツバメをはじめとする海鳥の繁殖地として天然記念物と特別鳥獣保護区に指定されており、外海に面した島の海岸にはゼニガタアザラシの生息する岩場もあります。一般の方



◀ 海岸に迫る絶壁

▼ 島から厚岸を望む



の立ち入りは禁止されているため、目の前にありながら、大黒島は町民の皆さんが容易に上陸できない場所でもあります。さらに戦時中には、島に海軍の基地が設営されており、当時の施設が現在も遺構として残っていますが、その存在や意味は厚岸町民の間で十分に知られていないのが現状です。

そこで今回のワークショップでは、田尻（計画研究班 A01）が「大黒島の戦争遺跡」と題して講演を行い、戦争遺跡の存在とその歴史的価値、そして島内の自然環境が軍事施設の建設によって大きく改変されたことについてお話ししました。続いて、NTT 東日本の担当者からは、自社の持つデジタル技術の紹介と、それを活用して大黒島をはじめとする厚岸町のさまざまな地域資源をデジタル化する意義についてご説明がありました。

その後、小学生から高齢者まで幅広い世代の町民約15名が参加し、グループに分かれて厚岸の町について語り合いました。参加者は「次世代に残したい厚岸の宝」をテーマに、大きな地図を囲みながら意見を出し合い、思い入れのある場所に付箋を貼りながら町の未来について活発に議論を交わしました。こうした対話を通じて、厚



▲ 講演「大黒島の戦争遺跡」の様子

岸町を見つめ直す機会を提供できたと思います。

大黒島については、多くの町民が関心を失っている現状や、自然保護を優先するあまり住民が関わりを持てない状況が明らかになりました。生物圏を重視する一方で、人間圏との接点が失われ、「水共生学」で示される「ゆらぎ」が生物圏・地球圏へ大きく偏っている状態ともいえます。また、歴史の時間軸で見ても、大黒島は戦時中には島の植生が変化するほどの過剰な干渉を人間圏から受け、一方、現在はほとんど放置されているという人間圏の影響を極端に大きく受けた事例と言えます。今後も大黒島の調査を継続し、NTT 東日本のデジタル技術を活用しながら、水・生き物・人のより良い共生のあり方を模索していきたいと考えています。



▲ 大黒島近景（特攻艇秘匿壕）



▲ ワークショップの様子

i Dig（掘る）のスラングから派生した造語で、地域固有の文化や歴史を探求し、地域の魅力を発見・発信することを目指す NTT 地域循環型ミライ研究所のプロジェクト

フィールド：石垣市

2024 年「石垣島未来シナリオワークショップ」の開催報告

谷口 智哉・鈴木 ミチル・
田口 果林・武田 結菜・
竹中 絢音・中原 梢
(九州大学共創学部 学生)、
藤岡 悠一郎 (九州大学 准教授)

水共生学プロジェクトでは、石垣島を含む琉球列島を研究対象地域の一つとし、名蔵湾のサンゴ礁や干潟（名蔵アンパル）の研究や絶滅が危ぶまれている水生昆虫の保全などに関する取り組みを進めてきました。それと同時に、石垣島の将来の姿を様々な立場や年代の方々とともに考える「石垣島未来シナリオワークショップ」を2023年から国際農林水産業研究センター（JIRCAS）と共催してきました。2023年は、公務員や会社員、農業従事者や高校生などの計19名に参加いただき、4つのグループに分かれて石垣島の将来像を話し合いました（2023年の報告は水共生学ニュースレター vol. 5に掲載）。そして、2024年11月9日（土）に2回目のワークショップを石垣市役所の会議室にて開催しました。



▲ ワークショップの進め方について確認し、複数のグループに分かれてディスカッションを行った

2023年に実施したワークショップでは、高校生などの若い世代と年長の参加者が一緒に将来像を描こうとすると、石垣島に関する知識や経験の差が浮き彫りになりました。特に、若い世代は過去の石垣島の状況を知らないため、過去を踏まえた将来像を描くためには、ワークショップの中で昔の石垣島の様子を振り返りながら議論するのがよいのではないかと考え、今回のワークショップではプログラムを修正しました。参加者は、八重山高校の生徒



▲ グループワークでは模造紙や付箋、カラーペンを活用し、それぞれの意見を可視化した

25名、石垣出身の年長者7名、行政職員（石垣市役所、環境省）の方3名であり、九州大学やJIRCASの研究者、ファシリテーターである九州大学の学生を含めると計50名でした。

ワークショップには、高校生から大人までの幅広い年代と職業の方が参加し、現在・過去・未来の様々な観点から石垣島のことを議論しました。その中でも、特に御嶽やアンガマー（お盆の行事）などの文化やサンゴ礁やマングローブ林などの自然環境については石垣島ならではの話題でした。石垣島の過去の様子を年長の方に話していただく部分では、過去の状況に高校生が耳を傾けていました。過去の石垣島の知識を共有したことで、今回のワークショップはより一層島の理想的な将来像やそれに向けた現在の課題について多様なアイデアが出されました。

各グループの具体的な内容について、当日ファシリテーターを務めた学生からの感想を紹介します。

私は高校生の「お祭りはあたり前だから守ろうとかは考えないかも」という言葉が印象的でした。変化なく続いてきたお祭りは、島の高校生にとっては「あたり前」で、近年大きく変化する自然は「まもる」ものであると表現していました。

（鈴木 ミチル）

今回のワークショップは、石垣島の魅力とマイナス面を、島で生活しているからこそ知っている高校生と議論できる貴重な機会でした。自分が住む場所について真剣に考える彼らの姿勢が魅力的でした。その地域の持つ個性を、今回のように過去・現在・未来を行き来しながら考えることで、大きな学びになりました。（田口 果林）

暮らしの豊かさのための発展と自然の保全という、一見相反するもののバランスをどう取るか。世代ごとに意見が異なり、新たな学びが多くありました。私自身も、石垣島出身として何かできることはないか模索した時間でした。（武田 結菜）

高校生の「整備されていない道の話が現在の問題として上がったが、過去の話聞いて今は整備されたほうだと気づいた」という感想が印象的でした。異なる年代の人が集まり、地域の過去・現在・未来について議論することで、新たな気づきが生まれると実感しました。（竹中 絢音）

私は高校生が述べた面接や就活で出身地により好印象を持たれることが印象的でした。「石垣レッテル」と感じましたが、議論を聞くと「距離」による多くの不便さに適応し、「距離」によるメリット（島の独自性）を活用する様子から、それが単なるステータスではなく、離島ならではの強さとして高校生たちのアドバンテージになっていると感じました。（中原 梢）

終了後に高校生を含む参加者にアンケートをとりましたが、全体的に好意的な感想が寄せられました。今回、将来像を検討する際に過去の問題を組み込むプログラムを実施しましたが、別の課題も見えてきたので、今後さらに有効な方法を考案し、継続して実施していく予定です。

研究者紹介



大野 智彦

(名古屋大学 准教授)

令和6年度から公募研究の1つとして本領域に参加させて頂いております。採択して頂いた研究課題は、「長期化・複雑化した水をめぐる対立の政策過程分析」です。

最初は領域名称に従って何らかの共生や協働に関する研究計画を立ててみようと思ったのですが、どうもじっくりと来るアイデアが浮かびません。そこで思いついたのが、「共生」とは反対の状態である「対立」について理解を深めることで、水共生のあり方や実現に至る道筋を明らかにできるのではないかというアイデアです。

私はこれまで、ダム建設をめぐる利害対立がどのように生じているのか、そうした対立の中で政策決定がどのように行われているのかを調べてきました。いくつかの事例ではその対立は数十年に及び、利害も極めて複雑に入り組んでいます。水共生学がこうした状況をどう捉えるのか、複雑な意思決定の現実を整理することで何か貢献できるのではないかというのが、この領域における私の基本的な考えです。

特に今回の研究課題では、分析手法の改善を図ることで、水をめぐる複雑かつ長期にわたる対立を効果的に整理したいと思っています。こうした複雑な対立を整理する上で、政策過程論が提供するフレームワークや手法は有益

です。従来、政策過程論においては過去の新聞記事や会議録などの文字データを分析者が読み込み、その時々各政策主体の政策選好に数値を割り当てるといった方法で長期にわたる政策過程の変遷を把握したり、政策主体間の関係性の近さを探るといった方法が採られてきました。ところがこの方法では分析者の判断の客観性を担保するために、複数の独立した評価者が同じ文章を評価してその一致度を報告する必要があるなど、分析に時間がかかり、処理できるデータの量にも限りがありました。



▲ 約40年前に計画された山鳥坂ダム建設予定地付近(愛媛県大洲市)

この研究課題では、近年発展が著しい自然言語処理の手法を導入することで、こうした分析上のボトルネックを解消するべく、試行錯誤を続けています。これによって、今まで分析が難しかった長期化・複雑化した利害対立の実態を整理することを目指しています。

数多くの蓄積が存在する水研究の領域において新しい知見を打ち立てるのは難しいことですが、残された研究期間を有効に活用して、成果につなげていきたいと思っています。



▲ 筆者らによる東京・善福寺川での河川再生の取り組み

中村 晋一郎

(名古屋大学 准教授)

私の専門は水文・水資源学で主にアジアを対象に人と水の関係性についての研究とその再生のための実践を行っています。本研究プロジェクトでは、世界の大都市

で共通して生じる「河川消失 (Lost Rivers)」のメカニズムの解明に取り組んでいます。

都市は、人間活動の中心であり、その活動を支えるために河川や湖、水路といった水システムの大規模な改変が繰り返されてきました。その改変の結果、メガシティと呼ばれる大都市が世界各国に誕生し、そこでは地下水の汲み上げによる地盤沈下や洪水の激化、渇水といった水に関わる課題が深刻化しています。そして、それらの大都市で生じる共通の象徴的な現象として「河川消失」があります。河川消失とは、河川が暗渠化や埋め立てにより失われる現象です。東京でも、高度成長期を中心に河川消失が進み、明治初期と比較して約4割の河川や水路が失われました。海外の一部の都市では、都市環境の再生の一環で、消失した河川の再生が模索されていますが、ソウル・清溪川などのいくつかの事例を除いて実現に至っていません。一方で、開発途上国では現在も河川

消失が急速に進んでいます。

東京における河川消失の現象は、急激な人口増加、土地利用の変化、水需要の増加、地下水汲み上げによる湧水の減少、それらに伴う水質の悪化、そして洪水の激化といった、大都市の成長過程における複雑な人間社会と水システム間の相互作用(人間-水相互作用)の結果として生じたことがこれまでの著者らの研究で明らかとなっています。河川消失の現象は他の都市でも報告されているものの、河川消失に至るまでの人間-水相互作用の過程やメカニズムの都市間での共通性あるいは差異は明らかになっていません。そこで本研究では、世界の主要な大都市において、「河川消失」が生じる人間-水相互作用のメカニズムを明らかにし、そのメカニズムの都市間の共通性あるいは差異の解明を目指しています。



▲ 上流部分が暗渠化された渋谷川

成果発信

論文掲載

古川 不可知（計画研究班 B02）の論文が青土社の『現代思想 2023 年 11 月号』に掲載されました。人と水をめぐる根源的な思考の過程をつづった内容で、水共生学の取り扱う水と人と生き物の関わりについて観念的に捉えています。人間の外部でおこる事象が心理にも影響を与え、水循環と相似した水への認識が生じていることに、改めて共生とは何か考えさせられる内容です。

古川不可知（2023）「水と山と歩くこと ——ヒマラヤと水の物質性をめぐる断想」『現代思想 2023 年 11 月号 特集：＜水＞を考える』51(14): 176-186 青土社

論文紹介

古川不可知（九州大学 准教授）

本論文は、水とその物質性をめぐる思索である。水はいばしば、私からは離れてそこを流れる対象として捉えられてきた。だが実際には、水は雨や雪、水蒸気や氷河などに形を変えながら私たちに接して遍在し、ときに足場となったり、身体を凍えさせたりする。さらに水は摂取されて私そのものとなる一方、排出されて再び私たちを取り巻く。私たちはむしろ循環する水の中に、その一部として存在しているのである。

データベース公開

バイアス補正した気候予測データセットの公開

計画研究班 A01 代表 渡部 哲史（九州大学・准教授）が開発者として参加している下記のデータセットが、DIAS（データ統合・解析システム）より公開されました。

データセット名：
全国版 d4PDF ダウンスケーリングデータのバイアス補正データ

関連論文：
西村宗倫, 高田望, 因幡直希, 坂本光司, 柴川大雅, 吉田翔, 三浦悠, 渡部哲史, 仲江川敏之, 竹下哲也：全国 d4PDF ダウンスケーリングデータのバイアス補正データの開発と公開，河川技術論文集，第 31 巻，pp.421-426, 2025.

データセット紹介

気候変動の影響評価の際に用いる気候予測データを、バイアス補正を行った上で公開したものです。バイアスとは「ある気候モデルを使って過去の気候を再現したときに、再現しようとする統計的な特性と実際に再現された結果の間に生じる系統的な誤差」のことです。現実の世界と数値モデルである気候モデルが完全に一致することは難しく、両者には一定の差があります。その中で「何をバイアスととらえるか」「バイアスをどう補正するか」はデータセットの予測する結果に直結します。すなわち、バイアス補正技術は気候予測データセットの核と言えます。

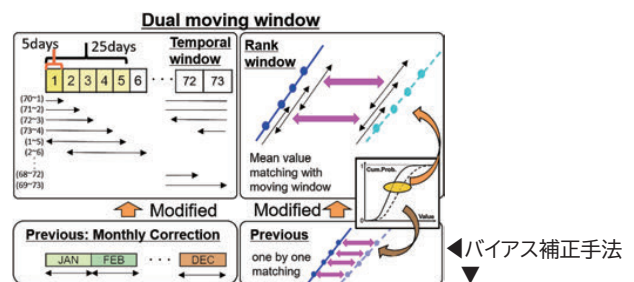
公開されている上記のデータセットは渡部が提案したバ



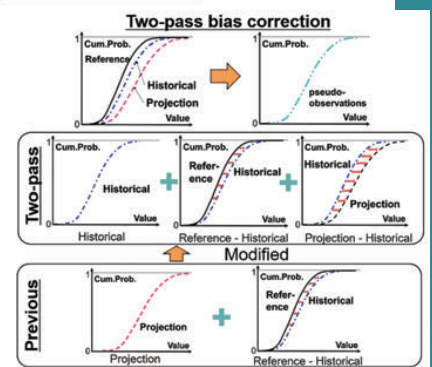
▲ 雲と氷河

そのような水と人間との直接的な関わりは、風雨に身を晒しながら日々を送る高山の環境下ではとりわけよく見て取れる。本論文では私の調査地であるヒマラヤの山岳地帯に住むシェルパの人々の実践や、筆者自身の山を歩く経験、また登山家の遺書などを手掛かりに、水と相互に浸透しあい、変化する水の姿に人間と同等の意志を見出し、死して水へと還ってゆく、そうした人間のあり方を考察している。

本論文は科学的な実証研究ではないものの、水について多面的に考究する水共生学の試みに、何かしらの気づきを提供できれば幸いである。



バイアス補正技術を採用しており、渡部はこのデータセット開発における主要な役割を果たしました。このデータセットで得られるデータは、特に「気候変動による水資源への影響」に関する研究に期待され、水共生学の他の計画研究班でも活用されています。



また、渡部自身が整備したデータセットも公開中です。上記データセットより解像度の高い内容ですが、データセットそのものの容量が大きいので、現在、インターネット上での常時公開の形はとっておりません。

詳細に関しては、以下よりお問い合わせください。

渡部研究室のホームページ
(<https://wlab.blue/main/>)



川の自然にみるヨーロッパの風土

五三 裕太（九州大学 助教）

ブリュッセルから電車で 30 分、古都ルーバンを流れるダイレ川では、自然の持つ機能を活かして洪水の被害を軽減する大胆な取り組みが進められています。川が貫流する中心市街地では、大学などの重要施設の浸水リスクが高く、1970 年代に政府は上流に 3 つの遊水池を建設する計画を提示しました。しかし環境 NGO は、これが生態系の破壊につながると強く反対し、20 年以上の議論を経て現在の洪水対策の実践に至ります。

この実践の核心は、人工的な制御を最小限にとどめ、自然な氾濫や地形変化を受け入れていることです。河道の随所に、ビーバーが倒した木が放置されています（写真 1）。流れを妨げる木は河川の粗度を高め、下流の都市に到達する洪水流量を減らします。その分、洪水は周囲の牧場に広がります。そこで環境 NGO は、地元農家と根強く交渉し、川沿いの農地を台地上に移転する取り組みを進めてきました。代わりに得た川沿いの土地は、氾濫水が溜まらないように地形改変した上で、現在も牧草地として利用を続けています（写真 2）。



写真 1 ダイレ川の河道：ビーバーの倒した木がわざと放置されている



写真 2 NGO が管理する川沿いの土地：牧草地として活用されている

こうした繊細な洪水対策の仕組みは、大変魅力的です。しかし、この発想を地理的な条件が異なる日本にそのまま持ち込んでも、意図通りに機能しない恐れがあります。まず風土の違いです。和辻哲郎が「牧場」と呼んだヨーロッパは、夏の湿度が低く、多少放置していても穏やかな草原が広がります。一方で日本の夏は高温多湿のため、短期間で背の高い草が繁茂し、景観や可用性を容易に損ないます。市民の文化も違います。ダイレ川では、地域の環境 NGO が行政案を止め、代替案を練り、地元と粘り強く交渉を続けました。しかし日本では、市民主導で公共的な事業が推進されることは珍しく、特に洪水対策などの防災事業は行政の仕事と思われがちです。

日本の川づくりは、長くヨーロッパを手本としてきました。明治期にはオランダから流量をベースとした治水を学び、戦後の自然復元はスイス・ドイツの近自然工法を参考にしました。しかし複合的な課題に直面するこれからの時代、単なる模倣ではなく、日本の風土・文化に根ざした道を描く必要があります。その際は、変動の激しい日本の自然に関わる伝統技術や、市民活動が果たすことのできる役割を再評価することが重要です。日本流の川づくりを描く上で不可欠な視点を与えてくれた、貴重な視察でした。

今後のスケジュール

12 月 13 日	総括班会議
3 月 1 日	総括班会議・研究会
3 月 中旬	水共生学シリーズ第 1 巻出版予定

編集後記

ようやく水共生学ニュースレター vol. 10 を発行いたしました。水共生学シリーズ出版に向けてたいへん忙しい中、執筆者の皆様には記事の執筆と確認にご対応いただきましてありがとうございます。

プロジェクトの終わりが近づき研究を総括する記事が増えてきました。次号が最終号です。

表紙：水共生学国際シンポジウム（撮影：谷口 智哉）

